



看護実践特論にグループワークをとり入れた効果 - 自己洞察を目的として -

松本, 比佐江
新田, 麗子
津田, 紀子
細川, 順子

(Citation)

神戸大学医療技術短期大学部紀要, 2:113-121

(Issue Date)

1986

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/80070033>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/80070033>



看護実践特論にグループワークをとり入れた効果

—自己洞察を目的として—

松本比佐江, 新田麗子, 津田紀子,
細川順子

はじめに

看護は対象者との相互関係の中で展開される援助行為であるが、この関係が発展的なものとなる為には、援助者の人間観を基盤にした対話能力が重要である。Carl Rogers は、この対話能力を向上させる為には、その過程で援助者が、その人自身の内部に存在するものを、自ら発見すること¹⁾(自己洞察)が必要であると提唱している。本学看護学科においても、対話能力の修得を目標に、自己洞察、助力関係の科目を開講している。今回、グループワークの中で自己の存在を経験することで、自分の実態を見つめられるようになると考え、この科目にグループワークをとり入れた。その自己洞察の達成度を知る為、学生のレポートの分析およびアンケート調査を実施し検討した。その結果、教育効果が認められたと考えるので報告したい。

科目の展開方法

時期：昭和61年1月20日～1月24日

総時間数：12時間

方法：1) 講義(4時間)……学生が臨床実習で記録したプロセスレコードを使用し、自己洞察の必要性について講義する。

2) グループワーク(8時間)……各グループ20名

⑦グループ……ロールプレイ及びグループ討義

①グループ……エンカウンターグループ

⑦グループ……エンカウンターグループ

④グループ……ロールプレイ及びグループ討義

なお、資料として“私のなかでの気づき”²⁾を全員に配布した。各グループの展開方法は担当教官の方針で行われたが、各教官共、学生の主体性が発揮できるよう留意した。

研究方法および対象

自己洞察・助力関係のグループワーク終了後レポートを課し、その内容から学生が述べようとしている事を一項目ずつカードに転記し、同質のものを分類、分析した。又、アンケート調査を実施し、その結果とレポートの関連を見た。アンケートの内容は、時間数、時期、グループの編成、人数についての良否と、今後役に立つと思うか、後輩にもあった方がよいと思うか、を無記名で記載するものである。

対象は、神戸大学医療技術短期大学部看護学科、昭和60年度3年次生80名であり、レポートの提出は100%、アンケートの回収率は92.5%であった。

結 果

1) レポートの分析結果

カードにより同質のものを分類、分析した結果、「自己をどう見つめたか」「今後どうしようとしているか」「その他（今回は割愛した）」に分類できた。さらに「自己をどう見つめたか」の内容は、A) 周囲にとらわれているもの、B) 周囲が気になりながら、自分に眼を向けようとしているもの、C) 自己の内面をみつめているもの、に分類できた。次にそれぞれの内容を見ると、A) 周囲にとらわれているもの（表1）は、自己を見つめているものなかでも周囲にとらわれている部分の強いもので、“自由に話し合うのは苦痛である”“深く考えないで逃げている”など11項目である。以下A) -①～A) -⑪と表わす。

表1. 自己をどう見つめたかの内容

A) 周囲にとらわれているもの

- | |
|-------------------------------------------------------|
| ① 自由に話し合うことは苦痛である。 |
| ② 深く考えないで逃げている。 |
| ③ あまり深く考えずに過ごしていた。 |
| ④ 自分の事を変に思わないだろうか。相手に本当に言いたいことが伝わるか不安。 |
| ⑤ 言葉足らずで話したいことが皆に伝わらないしこりがある。 |
| ⑥ 『あなたは何が言いたいのか？』『あなたの中味は？』と聞かれるのが怖かった。 |
| ⑦ 他人の意見に左右されているのじゃないか。 |
| ⑧ 自分の意見を持っていないのではないか。 |
| ⑨ 相手を解ったつもりでいることを解ったと思っていた。 |
| ⑩ 理論では解っていても心のどこかに他の人もだいたい私と同じようなものと自分の範囲の中でしか考えていない。 |
| ⑪ こんなどうでもいい、誰かがやってくれるだろう等の気持ちがでてる。 |

B) 周囲が気になりながら、自分に眼を向けようとしているもの（表2）は、自分を見つめているが、まだ周囲との関係で自分を見ようとしている部分があるもので、“矛盾だらけの自分”“グループワークをいやがっている自分”“人の目が怖くて黙っている自分”など23項目である。以下B) -①～B) -⑳と表わす。C) 自己の内面を見つめているもの（表3）は、素直に自分自身に眼が向いているものであり、

“「疲れた」「嫌だった」「つらかった」” “自分のことだけで精一杯”など35項目にのぼっている。以下C) -①～C) -㉔と表わす。「今後どうしようとしているか」の内容は（表4）今回の体験を通して、今後に向けての気持ちを表現しているものである。“もっと苦痛のない方法でグループワークをしたい”という逃避的な表現のものもあるが、“自己について考えてみたい”“自己をみつめる努力をしたい”など前向きの者が大部分である。

表2. 自己をどう見つめたかの内容

B) 周囲が気になりながら自分に眼を向けようとしているもの

- | |
|--------------------------------------------|
| ① 矛盾だらけの自分。 |
| ② 沈黙が続くのが怖くてしゃべってしまう。 |
| ③ “シーン”とした状態から逃げだしたい。 |
| ④ 自己洞察がなぜ必要かわからずもやもやしている自分。 |
| ⑤ グループワークをいやがっている自分。 |
| ⑥ 人の目が怖くて黙っている。 |
| ⑦ 話し合いの中で意見が言えないのは批判が怖いからだ。 |
| ⑧ 他人が自分の事をどう思っているか気になる。 |
| ⑨ 他人から良く思われたい、他人の目が気になる。 |
| ⑩ 評価ばかりを気にしている自分を認めたくない。 |
| ⑪ 他人の評価と自分の評価のギャップに苦しむ。 |
| ⑫ 自分の思っていることをそのまま言葉にするのは怖い。皆の反応がなければもっと怖い。 |
| ⑬ 相手の気持ちを聞きのがしていた自分。 |
| ⑭ 人の話をよく聞かない。 |
| ⑮ 結果を見つめる勇気がない。 |
| ⑯ 自分のことを見せられないと思っている自分。 |
| ⑰ 他人を通して自分が見えてくるし、自分を通して自分が見えるのが嫌。 |
| ⑱ 無気力、無関心、無協力の傾向がある。 |
| ⑲ 自分は自己中心的で他人に甘えている部分が多い。 |
| ⑳ 他人から何か言われ、傷ついても反抗しないし、何か頼まれて嫌でも断れない。 |
| ㉑ 他人の意見にたいする批判がわいてきてもなかなか口に出せない。 |
| ㉒ 卒直に自分を表現できない。 |
| ㉓ Aさんのこれからの事まで真剣に考えて偉そうな発言をしてしまったかもしれない。 |

2) アンケート結果(表5)

調査項目のうち、時間数については、丁度よかったという意見が83.8%で多数を占めている。時期については、良かった45.9%, 良くなかった33.8%となっており、特に㊦グループは良くなかったの意見が多い。グループ編成については実習グループが良い、が59.5%であるが、その他も20.2%ある。グループの人数は、丁度よ

かった60.8%と多数を占めているが、㊩グループのみは、人数が多かったという意見の方が多く見られる。今後に役立つと思うかについては、役立つと思う74.3%, 後輩にもあった方が良いかについても、あった方が良い82.4%と多数の肯定的な反応が得られている。

表3. 自己をどう見つめたかの内容

C) 自己の内面を見つめているもの

- ① 『疲れた』『嫌だった』『辛かった』
- ② 自分の事だけで精一杯。
- ③ 自分自身なさない。
- ④ 自分を見つめることを避けたいと思っている自分。
- ⑤ 自分の痛いところに触れたくないと思っている自分。
- ⑥ 私の視野の狭さがだんだんと解ってきた。
- ⑦ 沈黙が私の価値判断では悪い事、卑怯な事になっている。
- ⑧ 気づいていない自分を直視する事は怖い、そういう自分を認める事は嫌だと抵抗してしまう。
- ⑨ 都合の良い意見に嬉しい自分。
- ⑩ 高い評価を得たいという気持ちが余計に自分自身をがんじがらめにしている。
- ⑪ 頭の中で操作している。
- ⑫ 忠告に対して押し潰されそうになる。
- ⑬ 見たくない自分が見えてきそうな事に恐れている自分。
- ⑭ 自分の嫌さがはっきり出て怖い。
- ⑮ 感情を抑圧している。(怒り)
- ⑯ 自分からは行動を起こさない自分。
- ⑰ 勝手な欲求が満たされていない事に腹を立てている。
- ⑱ 私の正当化とは言いわけに過ぎない。
- ⑲ 無責任で身勝手。
- ⑳ 協力的でない。
- ㉑ 自分の意見を相手に押しつけようとしている。
- ㉒ 興味のあるものには身を乗り出し、思う存分自分を出す、興味のないもの意味の解からないものには何の反応も示さない。
- ㉓ 否定的態度で人に接している。
- ㉔ 反対意見の人には反発したり批判する。
- ㉕ 失礼な事を言う、誤解していると反発している。
- ㉖ 自分の枠で物を見る私であった事が解った。
- ㉗ 感じた事と違うことを表現している。
- ㉘ 看護婦としての立場に夢中になっている自分。
- ㉙ 冷めてしまった自分。
- ㉚ 他人を客観視し過ぎ、どんどん客観的になってしまってる。冷たい人間になってしまう気がしてならない。
- ㉛ 上手につき合っても本当はその人の事を好きでないクールな人間。
- ㉜ 以前と自分は同じではない(感じ方が以前と違う。)
- ㉝ 『本当は考えたいのかなあ』と、ようやく『考えない』『考えたくない』安易な所から腰をあげようとしている自分がある。
- ㉞ 自分を知るたびに相手を受け入れる範囲が広がっていく。
- ㉟ こんな時間無駄だったのではないか。ロールプレイでもやっていた方がいいのと思う事もあったが自分を知っていく事それを認めるという事、表現していく事を行なう時に自由だった。むしろ発言し表現する事で、隠れていた抑えられていた自分を解放するような気がした。

表4. 今後どうしようとしているかの内容

- ① もっと苦痛のない方法でグループワークをしたい。
- ② 冷めた自分をもう一度脱ぎ捨てる時がくるような予感が出ている。それは患者さんと接することから始まるかもしれないし、日常の試練が重くなった時であるかもしれない。わからないが、このまま自分を甘やかしていたのでは人間的に成長しないだろうと思っている自分自身にほっとしている。
- ③ この授業ではじめて自分について考えはじめたのでまだ考えがまとまっていないが考えてみたい。
- ④ 自分をみつめなおす努力をしたい。
- ⑤ まだ自分をあまり出せなかったがその糸口がつかめたので努力をしたい。
- ⑥ 自分をかくさず素直に表現する努力をしたい。
- ⑦ 恐れてばかりいなくてもっと自分を表現してゆくことが大切だと思う。
- ⑧ 今まで無意識のうちに否定したり顔をそむけていたことがひき出された。それを客観的に見つめることで今後の私を大きく変ぼうとさせることができると思う。そのように努力したい。
- ⑨ 機会をみつけてロールプレイをやりたい。そして、もう一度相手の心を考え自分の見方を見なおそう。
- ⑩ 経験は大事だと思うのでやらないで後悔するよりも行って反省するようチャレンジする姿勢を持ちたいと思う。
- ⑪ 今、私にとって必要なことは自分で考え判断し、行動することではないか。
- ⑫ 何かに対し、感じ考えるという行為はさけられないと思っている。
- ⑬ 内容は看護に関係のないような気はするが、各自の沈黙に対する考えを解することができ、今後患者との間で沈黙があった時の糸口がつかめた。
- ⑭ 患者自身も気づいていない無意識の部分を理解できるようになりたい。
- ⑮ 卒業後もこういう学習を続けていくことができたらよいと思う。
- ⑯ 未熟な私が看護婦になっていいのかわからないが、未熟だからこそ看護婦になって自分を見つめていきたい。怖さや嫌さを乗り越えて、自分を知らなければ他人の気持ちに気づくという大変なことはできない。

表5. アンケート結果

考 察

アンケート項目	グループ				総数	率 (%)
	㉗	㉘	㉙	㉚		
回数	20	20	20	20	80	100
回収率	18	19	19	18	74	92.5
時間数	丁度よかった	8	12	16	16	83.8
	多い	0	4	2	1	7
	少ない	0	1	1	0	2
	無回答	0	2	0	1	3
時期	よかった	5	8	11	10	34
	よくなかった	10	8	4	3	25
	わからない	3	3	4	4	14
	無回答	0	0	0	1	1.4
グループ編成	実習グループがよい	8	10	15	11	44
	実習グループ以外がよい	4	6	0	3	13
	その他	6	3	4	2	15
	無回答	0	0	0	2	2.7
人数	丁度よかった	11	4	13	17	45
	多かった	6	15	6	1	28
	少なかった	0	0	0	0	0
	無回答	1	0	0	0	0
今後役立つと思うか	役立つと思う	13	13	15	14	55
	役立つと思わない	0	1	0	0	1
	わからない	5	4	4	4	17
	無回答	0	1	0	0	0
後方にもあいか	あった方がよい	14	14	18	15	61
	なくてもよい	0	1	1	1	3
	わからない	4	4	0	2	10

各群の学生の表現のなかから、いくつかをとり上げ、“自己を見つめる”ことの内容を考察したい。

1. A) 周囲にとらわれているもの。
 (1)日常生活の中で、自己実存感のないことに気づきかけたもの

A) -②「深く考えることから逃げている」。
 A) -③「あまり深く考えずに過していた」。
 これらの表現は日常的に学生のことばとして聞かれる。その場合、漠然としか考えていないのであって、“考えていない自分”や“逃げようとしている自分”に気づいていない場合が多い。現在我々の接している学生は、生活面でも、勉学においても受身的に育ててきた学生が多く、積極的に自己表現する機会が少ないともいえる。従って自分が何者なのか、はっきりしない学生もいると思われる。そのような学生が、あらためて、“考えずにいた自分”や“考えることから逃げていた自分”に気づいたことは、自己洞察の足がかりになると考える。すなわち、逃げ

ていた自分は何なのか、とか、考えずにいた自分とは…？と自己の内面に向きかけをつくるものといえよう。これは漠然としか考えていない自分とは質的に異なるものであろう。何故ならばそこに自分が存在しているからである。

ある学生は、“今後どうしようとしているか”の中で⑩「今、私にとって必要なことは、自分で考え、判断し、行動することではないか」と力強く表現している。これは自己洞察により、学生が生活するうえで自分自身にとって、何が必要なかを明確にできたためといえよう。

(2)自分の行動の規範が他者にあるもの

A) -④「自分のことを変に思わないだろうか。相手の本当のことが伝えられるだろうか」。A) -⑥「あなたは何が言いたいのか？」「あなたの中味は？」と聞かれるのが怖かった。の表現には、他人の眼を気にしている自分や、自分が怖いのは、誰かに訊かれる為だと、半ば他人のせいにしてしている自分がある。これは自分の行動や感じ方の規範が他の人にあり、自分が何者なのかははっきりしない。確かな自己がないまま相手の基準に合わせて行動しようとする自分といえる。自分が行動をおこす時、自分の感じや考えを中心にすえて、相手はどうだろうと、ひろげていくのではなく、常に周囲の本人への評価を念頭において行動し³⁾なおかつ、それを意識していない時、確かな自分がないといえる。

見藤のいうように³⁾他者からの評価を気にしながら行動する人は、他者からよい評価となって返ってくることを考える時、青年期の発達課題⁴⁾と相俟って、自分を見失いやすくすると考えられる。B) -③④⑤⑥⑦⑧, C) -⑨の表現は、周囲の評価にとらわれていた学生を表わし、その傾向を示すものである。

2. B) 周囲が気になりながら自分に眼を向けようとしているもの。

B) -⑬「相手の気持ちを聞き逃していた自分」の表現には、相手に気がとらわれながらも、聞き流していた自分があったのではないかと自分に眼を向け始めている。いわゆる、知識では“傾聴とは聞き流すことではない”とわかり

ながらも、自分の態度のなかに、“聞き流している自分があることに気づいている。

B) -⑭「結果をみつめる勇気がない」の表現には、将来または、未知のことに捉われながら、自分の内面に向っているものといえる。

また、B) -②「沈黙が怖くて喋ってしまう自分」、B) -③「“シーン”とした状態から逃げ出したい自分」など、沈黙の場面では、よく味わう体験である。

学生は、周囲も自分も沈黙している状態に対して、沈黙を怖く感じたり、逃げ出したいと思っている自分に気づいているといえる。

これらの学生の表現は、未知のこと、相手または、まわりのことを気にしながらも、自己の内面に向かっているといえる。いづれにしても学生自身が、自分の態度の中に聞き流している自分や、未知のことに捉われている自分、沈黙を怖がっている自分に気づいたことは、洞察の程度は浅いにしても、自己洞察の機会を得たと思われ、今後の活動に生かされる可能性があるといえる。このことは沈黙を経験するなかで、自分を動かしているのは、怖さや、逃げたいと思っている自分であることを実感として得たといえる。そのことをふまえて沈黙の意味⁵⁾が理解できたと考えられる。ある学生は、“今後どうしようとしているか”の中で、⑬「(グループワークの)内容は看護に関係ないような気はするが、各自の沈黙に対する考えを解することができ、今後、患者との間で沈黙があった時の糸口がつかめた」と表現している。これはグループワークのプロセスで、自己洞察の可能性が開け、次の行動へのステップになったと考えられる。すなわち、学生はひとりひとりの沈黙の違いがわかり、自分と他者との違いに気づいた。さらに相手を理解したいと思うとき、自分の感じたことを相手に、確かめる必要性を学んだといえる。

3. C) 自己の内面をみつめているもの。

C) -④「自分をみつめることを避けたいと思っている自分」。C) -⑤「自分の痛いところに触れたくないと思っている自分」の場合、

今その時に経験している自分を見つめているといえる。

いわゆる“みつめたくない自分”や“触れたくない自分”など、その時、体験している気持ちは、今までならば、意識の外にしめ出されてきたと思われる。それをあらためて気づき、探究しようということであろう。すなわち、自分の周囲や、周囲によって動かされている自分よりも、もっと重要なものとして、自己自身が、自分の前に出されてきたといえる。そのことは、その人が持っていた態度の曖昧性を明らかにすることにもつながると思われる。

つまり、“自分を見つめることを避けたい”と思っておりながら、“みつめさせられている”と思っていたり、“痛いところに触れたくない”と思いながら、“傷められている”ように思っているなど、真の自分自身とそれを感じている自分とは異なっていることに気づく。そのような態度の曖昧性を明らかにすることにより、ありのままの自分に近づくことができるであろう。

これは、Carl, Rogers の提唱する援助的関係における、“真実性と自己一致”と同じ意味であると考えられる。彼は、このことを援助的関係の重要な条件であると述べている。¹⁾したがって、自己洞察により、自分を知ることは、看護場面における助力関係をつくるうえで、欠くことのできない基本的条件といえる。

4. 今後どうしようとしているか。

自分が、自己を見つめて、いろいろ検討することは、苦痛であることが多く、苦痛に対しての拒否的反応は当然である。たとえば、C) - ①「“疲れた” “嫌だった” “辛かった”」。C) - ③「自分自身なさない」などの直接的な情緒的経験であったり、C) - ⑩「頭の中で操作してしまっている自分」など知的経験であったりする。それらの経験の多くは否定的なものである。この自分に対する否定的な経験は、理想的な人間像を追い求めることと、それを追いかけているその人自身の在り方、生きている姿との間にズレがあり³⁾、そのズレが自分自身にわかった時、経験することである。

否定的自己の経験は、生活しているありのままの自分を見つめ、自己の内にある歪みや、ワクや、カラに気づいていくことであろう。それは単なる知識や理論ではなく、日常的で実践的といえる。それだけに自分自身を見つめることは苦痛であるが、より着実に自己の人間性を高めることになっていくと思われる。

しかし、この体験のきびしさは“今後どうしようとしているか”の中の①「もっと苦痛のない方法でできないものか」という学生の表現から、実感として読みとることができる。このきびしい体験から、ともすると逃げようとする自分を、はっきり意識し、言語化していくプロセスで逃げようとしている自分をひき受ける勇気が、自己の内から生まれるであろう。

それは、開放されていく自分、自由な自分として経験されるのではないか。エンカウンターグループを経験したある学生は、C) - ③「こんな時間無駄だったのではないか、ロールプレイでもやっていた方がいいのにとすることもあったが、自分を知っていくこと、それを認めるということ、表現していくことを行なう時、むしろ発言し、表現することで、隠れていた、抑えられていた自分を開放するような気がした」と表現している。経過する時間の中で、その時、その時の変ってゆく自分を見つめ、表現することによって、開放されていく自分に気づいている。すなわち自己洞察によって、抑圧に要したエネルギーが、前向きのエネルギーになり、新しい態度や行動を生み出すことができるようになった⁶⁾といえる。

また、“今後どうしようとしているか”の中で⑩「未熟な私が看護婦になっていいのか不安だが、未熟だからこそ看護婦になって、自分を見つめてゆきたい」と表現し、未熟な自分を引き受ける覚悟と共に、これからの自分の進路についても真摯な前向きの姿勢を読みとることができる。

見藤は、現在生ける人間を対象とする臨床的あり方を検討する姿勢を2種類に大別している。⁷⁾

(1)検討する者の現象の見方、かかわり方が、検討する側の存在条件を不問にしたまま現象を検討する方法(aとする)。(2)現象をみている者のありよう、存在の仕方を視野に入れて現象をみていく方法(bとする)をあげている。この度のグループワークにおいても、“自己をどう見つめたか”を分類すると、A、B、C群に分けられたことは、前述のa、bの姿勢を表わすものである。すなわち、aの姿勢は、A群にみられるように、自分の意識が、自己の存在よりもむしろ周囲に向いているといえるし、bの姿勢は、C群にみられるように、自己の在り方を含めて、現象を捉えようとしているといえる。

そして、グループの話が進むにつれて、内容が、aからbの姿勢になっていく時、グループメンバーに安心感や信頼感が高まり、グループに意味を感じるようになる⁷⁾といわれている。

学生のアンケートで、後輩にもあった方がよいか、の設問に対して、“あった方がよい”82.4%と高い比率を示しているのは、グループワークの体験学習は効果があったことを示していると考えられる。

5. 時期、グループ編成、人数について。

実施した時期について、“よかった”45.9%、“よくなかった”33.8%の結果を得たが、これは就職、並びに進学受験の為に、気持ちの余裕を持たなかったこと、実習の途中に実施された方が、その後の実習に生かされるという理由に依るものである。

グループ編成については、“実習グループがよい”59.5%であるが、その他も20.2%と全体の1/5を占めている。これは実習グループと、それ以外のメンバーがミックスされる方がよいという意見であった。その理由は、実習グループは、話しやすい一面、かたよった考えにならないかという気持ちと、他の人の意見も聞きたいという考えに依るものである。

グループの人数について、丁度よかった60.8%と多数を占めているが、④グループのみが、19名中、15名が多かったという意見をもっていた。このグループは、20名の学生が全員で話し

合いを行ったもので、他の三グループは、20名をさらに2～3グループに分けて行った為と考える。従ってグループワークの人数は多くとも7～10人が適切であるといえる。

ま と め

1) エンカウンターグループおよび、ロールプレイのグループワークにより、学生は自己をみつめる体験をしていることがわかった。

2) 学生の自己洞察には、段階があり、それは周囲に目がむいている段階から、素直に自己の内面を見つめる段階であった。

3) グループワークにより、学生は次のことを学んでいる。

①自分自身であることの意味

②自分と他人との間に明確な違いがあることに気づいた

③それをふまえて、相手の言動がその人にとって、どういう意味があるのかを、正確に汲みとるためには、その時その時の、自分の感じや思ったことをもとに、相手に確かめてみることの必要性

4) 今回のグループワークが、学生の自己洞察を可能にし、さらに前向きの姿勢になったのは、開講時期が臨床実習終了後であったこと、グループ人数が20名であったこと、学生の主体性にまかせたことに依ると考えられる。

文 献

1. Carl Rogers, 島瀬 稔 編訳：人間関係論，岩崎学術出版社，1967，p 32
2. 杉戸恵理子：私のなかでの気づき，看護学雑誌，41（8）：779，1977
3. 見藤隆子：気づけなかったことが気づけるようになるプロセスを探ってみると，看護学雑誌，41（8），775，1977
4. 小此木啓吾：アイデンティティ論，現代のエスプリ，78号，5，1974
5. Max Picard, 佐野利勝訳：沈黙の世界，みす

6. Karen Horney, 霜田静夫, 国分康孝訳: 自己分析, 誠信書房, 1983, p 106
7. 見藤隆子: 看護教育へのエンカウンターグループの導入, 看護教育, 27(4):245, 1986

Effect of Group Work by Its Introduction to Curricula

Hisae Matsumoto, Reiko Nitta, Noriko Tsuda
and Junko Hosokawa

ABSTRACT: With a view to deepening self-insight and strengthening cooperation among senior nursing students, two kinds of group work, that is "encounter" and "role-play", were introduced to their curricula in 1985. After its introduction, each student was requested to write a report on "My Real Self—Looking into Myself." Those reports were carefully analyzed and as a result, two important problems were raised. The first one was what they thought about themselves during their group work and the second one was what they were going to do in order to enrich themselves and have better human relationships.

Concerning the first problem, three types of students were found: (1) students who cannot think about themselves as they are, (2) students who can think about themselves as they are, and (3) the students who are between the stages of (1) and (2).

Regarding the second problem, they answered that they wanted to try to know themselves better to elevate themselves and also try to show themselves as they are in order to have better human relationships.

We also delivered a questionnaire to each student pertaining to the introduction of group work to curricula. Its result indicates that out of 80, 55 students (74.3%) answered group work would be very helpful for their future work and 61 students (82.4%) answered it would also be good for their juniors to have group work in their curricula.

Key words: Group work,
Encounter,
Role-play,
Self-insight.